

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第 2 期 7 号 — 通巻第 19 号 —)

Working Paper Series 2-7-11

2012 年 3 月 31 日

第III部：岩田弘追悼文

岩田弘先生の経済学を振り返る

五味久壽

(立正大学教授 hmytt06133_at_tbk.t-com.ne.jp)

http://www.unotheory.org/news_II_7

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail:contact_at_unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>.

岩田弘先生の経済学を振り返る

五味久壽

岩田弘の経済学は、『世界資本主義』(1964)と『マルクス経済学上下』(1967, 69)によって代表されていると一般的に解されている。これらは、岩田先生の30歳代の著作であり、1950年代初頭から『剰余価値学説史』を入口として『経済学批判要綱』さらに『資本論』体系、および宇野原論と次々に正面から取り組んだ成果であり、社会的にも大きな影響を与えた。

これに対して、岩田弘の経済学は、その後半生においてどのような変化を遂げ、いかなる特徴を持っているかに関して、私の知る限り(私の記憶とノート、瞥見しえた限りでの岩田ノート——予想以上に緻密なものであった——)、また推測の限りで振り返ることによって、『世界資本主義Ⅱ』の完成を目指していながら果たせなかった先生を追悼したい。なお、岩田弘は、立正大学専任教員として在職35年6か月(教授として31年)在職し、理論経済学のリーダーとして、学問の発展に寄与した。

『世界資本主義』は、「新情報革命と新資本主義の登場 グローバルネットワーク資本主義としての新資本主義 資本論体系の今日的意味を問う」という副題を付した『世界資本主義Ⅰ』となって、2006年に増補刊行された。著者自身が、40年以上の時間を隔てて過去の問題提起を振り返って総括を試みた稀な書物と言えよう。

『世界資本主義Ⅰ』の序文「世界資本主義増補版の刊行にあたって」では、1964年以後の世界史的事件の総括が試みられている。

第一に挙げられた論点は、「1968年3月のドル為替の金決済の停止」「これによる第二次大戦後の国際貨幣システム、IMF体制の実質的崩壊」を予測していたが、「その結果として生じた事態は旧版の予測とはかなり違っていた」ことである。ドル為替の金決済の停止以後が、「1930年代のポンド為替の金決済停止とこれによる大不況の深化の経験」とは異なった展開であることを認めたのは、石油危機のすぐ後に資本主義経済が引き締めを行う能力を持っていることを評価した比較的早い時期であったと記憶する。

1970年代には、「労賃について(1)～(4)」を立正大学『経済学季報』に、また『国家論研究』に「共同体・国家・資本主義」という主題に関係する連載を行い、居住地域の住民運動にも関わった。その縁でマンション管理組合の初期の理事長を務め、住民運動の応援に対する義理を感じて周辺地域の住民運動にも関わった。このことは、『世界資本主義 I』の序文が言うところの「ソシャリズムやコミニズムとは何か、またコミニズムとは、いわゆる共産主義か、それとも共同体主義(コミュニティ主義)か、といった問題の根底からの問い直しを要求するもの」として作用したのではないか。

1976年7月から半年間、パキスタン航空の南回りヨーロッパ線を利用して「国際通貨システムの研究」をテーマとした外地留学に出かけた。この期間には、北京、カラチにも短期間ではあるが逗留した。さらにエジプトにも行き、飛行機の窓から農業社会における集落の配置(中国の集落の配置とエジプトの集落の配置との類似性、治山治水の状況、都市と農村の関係、産業の配置など)を観察し、ヨーロッパでは、ギリシャ・ローマ型ポリス社会とゲルマン型社会の集落構造の相違に注目した。

帰国後は、こうした歴史的イメージの観察を踏まえて、宇野原始的蓄積論批判、後には特殊歴史的ヨーロッパシステムと明確に規定されるようになる資本主義の発生過程への振り返り、ローマ帝国以来の歴史的遺産の上に立つ産業革命の技術的基礎論、重金・重商主義段階の考察などを経て、自由主義ブルジョアイデオロギーの普遍性とその限界、共同体論とりわけ共同体相互間の共同体関係などの問題を提起した。これを通して、先生の関心は、資本主義の範囲を超える世界史、人類史の全体認識という方向にしだいに向かった。

大須事件の判決の結果、執行猶予の期間であった1979年5月31日から1980年9月30日まで岩田先生の教員職が解かれ、立正大学嘱託(経済研究所勤務の職員身分)となった。1980年10月1日から教員職に戻り、学生をそれまで以上に熱心に指導した。

1970年代の仕事をまとめた『資本主義と階級闘争』は、1983年刊行当初「共産主義 I」という副題であったが、後に副題を「資本・労働・世界資本主義」と変更した。共産主義という表現は、日常的なコミニズムという表現(岩田は共同体という表現も日常的認識とは異質のものとして回避した)に変わった。

『世界資本主義 I』序文の第二論点は、「スターリン死後直ちに顕在化したソ連体制の動揺であり、80年代におけるソ連社会主義の無残な自壊であった。社会主義についての筆者の当初の理解は

宇野弘蔵と同じであり第1次大戦とロシア革命を契機にして社会主義への世界史的な移行が始まったとの認識であったが、この自壊は、その再検討を迫るものであった」ことである

1980年代の仕事は、ソ連社会主義の再検討——それが人類史に対していかなる問題を提起しているか——から始まったが、この時期の先生は、迷ったら高いところに上がって全体を見回すしかないと言われ、事実そうした方向に歩まれた。ソ連社会主義の経済的実体、その基礎的再生産単位としての国営企業の会計と管理、国家財政と企業会計の会計基準と両者の連関、原価配賦などの検討に時間が充てられた。ユーゴの自主管理社会主義の検討、これと並行して人類進化学、今西進化論の検討が行われた。

異なった観点からの世界資本主義の主張であるウォーラステインの『近代世界システム』に対しては、彼の言う世界帝国と世界経済との連関関係という観点からヨーロッパと中国との対比がなされ、固有名詞が付いたヨーロッパシステムとしての資本主義という発想がより具体化された。

1984年には『金融資本論』の検討が行われ、中国経済を国家資本主義的計画経済として説けるかの検討にも着手した。さらにマルクスの「資本主義的生産に先行する諸形態」の批判を通して、占有・所有論と支配服従との連関関係、マルクスのザスーリッチへの手紙、マルクス所有論の再検討を通じた私的所有・商品経済的所有の発生史の問題、所有の源泉は集団武力による占有から始まること、土地と人間との共同体的結合関係、商品経済関係と所有関係、権力関係と共同体関係、古代農業帝国の二重性、そこからさらにヨーロッパにおける古代から中世への移行問題などが検討された。あわせて大塚久雄の『共同体の基礎理論』に対して、①血縁的共同体から地縁的共同体への移行というテーゼが、血縁関係は共同体間関係の認識のフィクションに過ぎないこと、②生産関係の発展展開が権力関係によって媒介されるというシナリオがないこと、③商品経済関係および権力関係が世界関係として把握されず、世界関係に媒介されて人類史の歴史的発展が媒介されるという認識がないという批判が見られる。イギリス農業の発展史と囲い込みの歴史が検討され、大塚『欧州経済史』における局地的市場圏→近代的国民的市場という立論が、その外側で独自の組織原理を持つ世界市場関係によるヨーロッパ世界システムとしての資本主義の発生への理解を欠いているとした。これはさらに資本主義社会と先行する農業社会との関係、そこにおける世界システムとしての世界商業の役割の検討へと展開した。またこの共同体論は、個人の確立の契機の考察にもつながった。

椎名重明『イギリス産業革命期の農業構造』、佐伯陽介『古代共同体史論——非西欧世界と大崩

壊——』の検討により、共同体相互の共同体関係は共同体相互の序列関係、擬制的身分支配であることが明らかにされた。新たに中世権力——共同体的統合から権力的統合への移行——の本質に対する考察が行われた。生物の進化と人類の進化という問題意識が登場した。

地租改正と日本資本主義論争への振り返りを経て、資本論の第3巻47章「資本制地代の発生史」と『フォルメン』が対比され「いわゆる本源的蓄積」の再検討に向かった。ヨーロッパでは王権に対する領有権の私有権化が中軸であり、世界市場と世界商業がそれを徹底的に促進するとした。引き続き『日本歴史体系』全五巻の精読と並行して宇野弘蔵編『地租改正の研究』上下を再読し、宇野さんは、資本主義化以前の日本社会についてほとんど知らなかったのではないかと問われた記憶がある。小山修三『縄文時代』(岩田ゼミナールには考古学の学生も在籍していたことがあり、考古学にも興味を持っていた。)、大内力『地租改正前後の農民層分解と地主制』なども検討され、宇野・大内では古代・中世・近代という発展系列および重商主義・自由主義・帝国主義という発展系列が歴史的発展の一般法則として無批判的に前提されていること、資本主義が特殊ヨーロッパ的システムとして認識されていないことが批判された。

この後先生は、1987年にヨーロッパとアメリカの外地研修に出かけ、飛行機の窓から今回はより系統的に観察を行われた。旧大陸の密集農業地帯と新大陸の商品経済的粗放農業との違い、自然に対する態度の違い、ヨーロッパにおけるゲルマン社会とスラブ社会の構造的差異などの発見を語られた。当時のノートが見つからないが、これを通して先生の世界資本主義論が空間的にも広がったことは間違いない。

帰国し 1988年に大学院経済学研究科修士課程が設置されると、環境コースの福岡克也教授と協力し、世界経済コースにおいて中国人留学生の教育を通して中国経済改革・金融市場改革の研究を行った。北京大学経済学部教員の博士学位取得にも協力し、その縁により北京で1990年代初頭に講演を行い、その講演を聞いた上海の華東師範大学経済学部にも招かれ、この交流関係は現在に至るまで継続してきた。先生の死去を知った当時の留学生から「岩田先生は私たち中国の留学生にとっても親切で優しくかった。私たち留学生は先生に何も恩返しができなかった。残念です」というメールを受け取った。

1980年代の考察は、1989年の『現代社会主義と世界資本主義』にまとめられた。それを読み直した岩田先生が、「僕の論理にもまだあいまいなところが残っているね」と漏らされたことを記憶してい

る。

立正大学『経済学季報』に 1990 年に経済学原理論序説(1)～(2)、1991～92 年に資本主義の経済的組織原理(1)～(6)を連載したが、資本の生産過程の途中で中断した。これは、マルクスのころとは大きく異なる生産過程の具体的内容の本質的な難しさによると思われる。

1992 年には、1967 年刊行の『マルクス経済学上』が、新しい序文と補論「ソ連社会主義の崩壊とヨーロッパの市場的再編成」を付して『資本主義経済の原理』という題名で刊行された。この題名に関し、「経済学の原理」ではなく、「資本主義経済の原理」であること、原理は歴史的現実内に内在するものであり、絶えず現在の到達点を確認し、そこから過去の発展全体を振り返る必要がある」と言われた記憶がある。

この序文にある「ソ連を中心とする現代社会主義の世界体制が、大きく崩壊したという事実」が「根源的には、はたして人類は、資本主義と国家を廃棄することができるか、という原理問題」を世界史的に提起しているという考えは、最後まで持っておられた。

奥様が外地研修のころから体調を崩され、その介護に時間をとられていた。奥様が亡くなられると、先生の体調も変化があり、それまでは「毎年 1 冊本を書く」と意気軒昂であったのが、「若いころと違ってすぐに仕事に取り掛かれなくなった」となった。先生がコミュニティの力を言い、コミュニティの研究に力を注ぎ、そのコミュニティを維持するものが女性であると実感を込めて発言されるようになったのは、これ以降のことであった。

『世界資本主義 I』の序文の第三の論点は、1970 年代に始まるパソコンネットワーク革命、いわゆるクライアント・サーバシステムの発展であり、インターネットによるそのグローバルな連結と、これを起点にする新情報革命・新産業革命の起動と新資本主義の登場である。『世界資本主義 I』の第 1 部は、「新情報革命・新産業革命と新資本主義の登場」を表題としている。

先生は、戦時中の工場での経験をお持ちであり、「もともと理科系のタイプ」と言い、晩年になっても好奇心が旺盛であり柔軟な思考力を持っていた。「自分は機械のリズムが好き、機械システムは歯車と梃子による因果関係の論理だ」と言い、旋盤、印刷機、写真の現像機などを手元に置かれた。生物における遺伝子を有機体の言語情報システムとしてとらえ、「生物・生体システムへの接近による生物学的な生産力——ソフトな言語的生产力——の登場が始まっているが、これは従来の物質的な生産力概念を一変する」という問題提起を行った。

立正大学経済学部教員としては、1994年の経済学研究科博士課程の増設において、申請事務作業の大半を担った。立正大学教養部を情報文化関係の学部にも再編する計画が持ち上がった時にも、アイデアを直ちに提供された。学内行政に時間をとられ、学外の研究会や現代史研究会の講演などにはよく出かけられたが、論文執筆量は減少した。当時、「若いころは経済学をやればすべてわかると思っていたが、人間は何によって動くのか、人間をどうやって動かせばよいのかということが最近ようやく気付いてきた」と漏らされたので、先生にとっては必ずしも無駄なことではなかったであろうと推測する。

『世界資本主義Ⅰ』の序文の第四の論点は、「新産業革命による現代資本主義の分極化と中国・東アジア資本主義の台頭である。

先生は、1999年3月の定年直前に華東師範大学国際金融学院との共同論文集に資本市場の問題を書かれた。これは、本研究科に留学していた華東師範大学の副教授の博士論文「中国における資本市場の確立と中国産業の現代化」指導の際に、バーリ&ミーンズの「モダンコーポレーション&プライベートプロパティ」を題材とされたからであった。先生は、旧制高等商業時代に簿記を学び、会計学にも通じていた。『資本論』の2巻、さらに3巻について、簿記概念によって理解すべきことを繰り返し強調されていた。また経営学部の会計学の先生方に、「エンティティ」概念等についてよく質問していた。これが、先に触れた「資本主義と国家を廃棄することができるか、という原理問題」に関わっていたことは間違いない。定年後の先生は、「これからは君の助手をやるよ」と言われ、大学院の1コマだけを担当されたが、体力の問題もあり途中から自宅での研究会へと転じた。

『世界資本主義Ⅰ』の序文で最後の第五に挙げられた論点は、人間コミュニティの再生の運動としてのコミュニズムに対し、新情報革命・新産業革命の開始がその前提条件をいかにして準備するか、という問題であるが、この問題は、未完の『世界資本主義Ⅱ』の内容に関係する。最後に完成された稿だけが著者の責任を持った社会的発言であり、未定稿についての議論は慎むべきであろうが、先生は、2006年当時「律令制共同体国家と中国革命 中国革命の変容と中国新資本主義の登場」を副題とすることを予告し、入り口としての秦漢帝国と出口としての清帝国を明らかにすれば、大きな構想で問題提起できると考えていた。自分の特徴は演繹にあり、この本は演繹法で行くと言われていたが、時間が経過するにつれてしだいに中国史は一筋縄ではいかないと漏らすようになって

た。

最近では副題が「郷鎮コミュニティ革命としての中国革命 中国革命の包容性と中国新資本主義の登場 その 21 世紀的意味を問う」と変更し、アメリカ・シリコンヴァレー産業も地域コミュニティ集積産業であるとし、米中の両者が地域コミュニティ産業としての共通性を持つと捉えられていた。中国新資本主義論の方向を選ぶとすれば、中国の現状について具体的なイメージを持っている必要があると思えるが、1990 年以降訪中されたことはなかったのが残念である。これについては、残された資料を整理できれば、その上で論じたい。

岩田先生は、18 世紀のロマンがお好きであり、晩年には宮崎駿のアニメーションを論文のシナリオ作成の参考になると言って繰り返し見ていた。また相撲のTV観戦を好まれた。構想力と包容力のあった先生のご冥福を祈りたい。

(2012 年 2 月 20 日)